
運 命 の 人 ※ パ ラ レ ル 注 意

紅満 絢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の人 ※ パラレル 注意

【Nコード】

N4541J

【作者名】

紅満 絢

【あらすじ】

あたしは

あたしの知ってる銀さんに会いたいよ…

「銀さん いるー?」

いつもの日課で

夕飯前はおすそ分けをしに万事屋を尋ねる

「銀さんー?」

返事はない

銀さんどころか、神楽ちゃんも新ちゃんの声も

仕方がない：

？俺らが留守のときは勝手に部屋に入って良い？って言われてるし
不法侵入じゃないし

自分に言い聞かせ、勝手に万事屋のふすまを開ける
そして部屋に入ると：

「…いるじゃん」

目の前に居たのは、ソファで座りながらも寝息を立てる銀さん

「もう…だらしないなあ…」

こんな所で寝ちゃったら風邪引くじゃん
おすそわけだって 今日頑張った作ってきたのに
大切な日だから：

そばにあった毛布を軽くかけて、銀さんの寝顔を見つめる

あれ…

何だかあたしも眠く…

目が覚めて

目の前にあるのは…

戦場だった

人だか天人だかわからないけどとにかくすべてが真っ赤で
死体は串刺しになって横たわっていて…
あたり一面、死臭

「ひっ…」

あまりの驚きに後ずさる
いつのまにか体は痙攣で小刻みに震え、一瞬で吐き気に襲われる
そんなあたしを救ってくれたのは…

「あれ お前もう目ェ覚めたの？」
「…え？」

振り返るとそこには…

「銀さ…」
「大丈夫か？ 顔色悪いぞ」
「え？ あ、はい…」

あきらかに銀さんだった
でも身なりも顔つきもまるで別人で…

「あの…ここは？」
「ここはって…頭でも打ったか？」

そう良いながら苦笑する彼の表情は、銀さんに良く似ている

「そーさな…ここは戦場だ お前さんみてーな女が出る幕はこれっ
ぽちもねェよ」

「でも…」
「キレイだな」
「え？」

「キレイな顔してやがるな 傷一つねェ」
「…」

何だか：照れちゃうよ

「お前名前は？」

「えっと：絢」

「絢か：良い名前だな 親が名づけたのか？」

「いいえ 両親は私が物心ついたときにはもう居ませんでした」
「：そーか」

すると銀さんは何かを悟ったようにあたしの頭を優しくなでる

「あの：」

「悪いな 変なこと聞いちゃって」

ううん、と首を横に振る

「だって：あたしには銀さんがいるから」

少し照れくさいけど：

しかし銀さんは私の目を見つめて

「え お前：俺の知り合いか？」

「え：？」

：何かが

胸に突き刺さって心にものすごく深い穴を開けた
銀さんが：あたしを知らない

でも：そっか

この人が銀さんに似ていたから変に安心してたけど

違う

ここは戦場

あたしの知らない所

さっきまであたしは普通に銀さんの居る万事屋に行って…
それから…

それから…？

「あたしは…」

「おい、銀時！」

—え？

今、銀時って…

「ね、ねえ！！やっぱりあなた銀さ—…」

「んだよヅラか」

「ヅラじゃない、桂だ」

桂…？　　って…桂さん？

声のほうを向けば髪を一つに結わえた桂さんが立っていた

「時に銀時その娘は？」

「あ？別になんでもねーよ」

「隠さなければならぬ関係なのか…　まさか貴様この娘とニャンニャン…」

「するわけねーだろオオオオ？！！？！大体ニャンニャンて…お前古すぎなんだよ！！！！」

「…はあ 冗談だ」

そう言いつつこちらを向く桂さんの目は鋭く睨んでいる様に見えた
一瞬身震いをする

「ぬしは何者だ？」

「え？えっと…」

あたしは…何者？

この世界で言う…何？

「…答えられぬか ならば仕方ない」

チャキッ

刃物の音を立てて

桂さんの刀があたしに向けられる

一瞬で、体が硬直した

刀だなんて…

真選組の人たちとかが持つてるだけで、あたしは触ったことすらない
それに桂さんの…一匹たりとも獲物を逃がさないような、この眼

「あ…あたしは…」

あまりの恐怖に声が裏返る

体も振るえ、これ以上声も出ない

もう…ダメだ…っ

そう思ったとき

目の前を白い大きな影が覆った

「!!」

顔を上げれば銀さんと桂さんの一騎打ち

銀さん

なんて綺麗に舞うの

まるで？夜叉？みたい

「おい　ヅラよお…見境無しの人殺しは良くねーだろ」

「邪魔するな銀時　その女、敵かも知れんぞ」

「コイツは…そんなんじゃねーさ」

「何故そんなこと…」

「お前エーは頭が堅すぎんだよ　コイツは人間だ　なあ、絢？」

？絢…？

「あ、あたしは…」

銀さんが

あたしのことを知らない銀さんが

あたしの名前を呼んだんだ…

「あたしは 銀さんの…」

でも

違った

あたしの知ってる銀さんの呼び方とは

全然違ったの

「み、未来のお嫁さん!!」

「一は？」

自分でも何を言ってるのか良く分からなかった
んだけど
でも

あたしは

あたしの知ってる銀さんに会いたいよー…

「一絢！！　おい、絢！！」

「ん…？あれ　銀さん…？」

「はあ…やっと起きたか」

驚いてがばっと起きる

目の前の風景は

いつも通りの、万事屋だった

夢だったんだ
さっきの銀さんは

「あ、そうだ！！今日ね、おすそ分けしに来たの！！」
「おすそ分け？」

銀さんのかぶりには触れず、冷蔵庫からそれを取り出す

「？何だコレ」
「さあ？何でしょう」

鼻歌交じりに箱を開ける
そして顔を出したのは苺の乗ったショートケーキ

「おお！！　　すげーうまそーじゃねーか！！」
「でしょ？そういうと思ってわざわざ作ったの」

「ありがとな」

「ううん だって今日は特別な日だもん」

「特別…？」

「そうだよ」

やだなあ…

今日は10／10

銀さんの誕生日じゃない

「自分の誕生日忘れちゃうなんて…銀さんらしいね」

「あ？そーいや今日…」

やっと思い出し、だるそうに髪をかき上げ「悪い」と一言呟く

「ねえ、銀さん」

「ん？」

「あたしは…銀さんがいてくれてよかったよ」

「何だ急に…」

「誕生日おめでどう これからも一緒にいて…」

言いかけたのに突然

銀さんに抱きしめられて言葉がつむげない

「照れるじゃねーか、コノヤロー」

「銀さん…」

一瞬の夢だったけど
本当はものすごく銀さんに会いたかったの

だからあたしから銀さんが離れていってしまったら
きつとあたしは生きていけない

「絢…」

「あたし銀さんと…一緒にいたい」

「バーカ」

「え？」

「バーカ…？」

「ひど…」

「そう言うのはなア、男の方から言うもんなんだよ」

「え…？」

「え…？じゃねーよ ほら指輪」

「ええ?! 指輪?!」

「何だよ いらねーの？」

「い、いる!!」

銀さんからのプレゼントだ!!

…全然ロマンチックじゃないけど…

「はぁ…結婚すっか 俺ら」

「結婚…?」

「結婚」

けっこん…?

え? ちょ銀さん??

「いいの?」

「何が?」

「あたしなんかで」

「バカかお前…」

そう言って今度は触れるだけのキス

「お前意外ありえねーだろ」

顔が火照る

耳まで真っ赤になるのが自分でも分かる

「し…」

「し…?」

「しっ仕方ないから結婚してあげるよ!! 銀さんみたいな人…あたしじゃないと付き合えないもん」

「そーかい」

そう言って苦笑する銀さんの表情は

夢に出てきた真っ白い夜叉の銀さんに良く似ていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4541j/>

運 命 の 人 ※ パ ラ レ ル 注 意

2010年10月28日05時11分発行